

論文

黒－色彩樹木画テストを用いた基礎的研究

—— 統合失調症群と健常群の比較を通して ——

植 田 愛 美

〔抄 録〕

本研究は健常群との比較を通して、黒－色彩樹木画テストに見られる統合失調症患者者の描画特徴について検討を行った。研究1では、色の数、空間使用量、樹木画の計測（樹冠の高さ・幹の高さ・幹の幅）、での3側面から検討を行った。特に空間使用量では、統合失調症群は健常群よりも使用量が少ない傾向が示唆され、色数の使用や樹冠の高さについても同様の傾向が窺えた。研究2では、病者の描画にどのような特徴が出現したのか事例を提示して検討した。2枚の表現がまったく変わらない描き手がいる一方で、それぞれの表現が全く違う描き手もあり、その点に関しては、色彩という要因が描き手に動揺を与えた可能性や、描き手自身の自閉性や固執性を誘発した可能性が考えられた。

キーワード：黒－色彩樹木画テスト、描画法、統合失調症患者

I 問題

1. 黒－色彩樹木画テストについて

バウムテストの変法として、色彩描具を用いて木を描くこと *schwarzen und farbigen Baumzeichnungen*（以下、黒－色彩樹木画テストと呼ぶ）が Fodor & Kendel によって 1966 年に紹介され、日本では名島らによって 1974 年に導入されている（名島, 1996）。この黒－色彩樹木画テストとは最初、鉛筆によって従来の樹木画を描いてもらい、その後に色鉛筆（12 色）で樹木画を描いてもらう方法である。この黒－色彩樹木画テストを用いた研究としては、名島（1996）が黒－色彩樹木画テストの意義をまとめた研究や、名島（1999）による黒－色彩樹木画テストの解釈をより詳細にまとめ、結果のフィードバックにも言及している研究が挙げられる。さらに村田他（2001）では、黒色バウムと色彩バウムの描画順序の研究を行い、どちらを先に描くかという順序は関係ないことを述べている。また植田（2018a）は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて、熟練者の視点に着目し、熟練者が描画を読み取る過程について検討を行なった。その結果、セラピスト（以下 Th. と略記）の体験プロセスについて、「描画

を読み取るための探索過程」「黒－色彩樹木画における共通理解の観点」の大きく2つの視点が抽出された。特に「黒－色彩樹木画における共通理解の観点」では、Th.が描画を眺める過程において、2枚の描画そのものに注目したり、鉛筆のみで描かれた描画や色彩を用いて描かれた描画に注目しつつ、描き手の表現内容を眺めるプロセスを辿る体験が、Th.の視点に影響を与え、描画イメージや解釈を深めていくことが明らかになった。加えて植田（2018b）では、描き手自身の主観的体験についても検討を行い、黒－色樹木画テストを描く際に、描き手はどのような体験プロセスを辿るかについて、描き手の語りを元にモデル化を試みている。その結果、「描画プロセスにおいて色が担う役割」「黒－色彩樹木画における中心描画体験」「描画プロセスによる感情体験」という大きく3つの視点が抽出された。特に「描画プロセスによる感情体験」という視点では、描き手自身の感情体験を取り上げており、描画する中で描き手自身がこだわり感や、のびのび感といった様々な感情を描く中で体験していくと考えられる。それらの感情は描画への不安全感とも繋がっている場合があるものの、その不安全感を意識した上で色彩樹木画に取り組むことで、描き手は黒色樹木画を描いた際に感じた不安全感を、色彩樹木画を描くことによって満足感へと昇華させることができる可能性について指摘している。このような視点については、名島（1996）は、バウムテストにおいて色彩画を導入することは、色彩と密接な関係を有している感情・情動を把握しやすくなり、さらに外界（他者）からの情緒刺激に対する応答可能性の高低を判断できる可能性について言及している。この点を色彩刺激という観点から見ると、例えばロールシャッハ・テストでは、色彩反応を感情や情緒の指標としているように（片口、1987）、上述の植田（2018b）の研究でも色彩樹木画の導入は、描き手自身の感情面に何らかの影響を与えることを示唆している。このように黒－色彩樹木画テスト実施は、名島（1996）が述べるように従来の樹木画テストでの情報だけでなく、描き手の情緒面などについてより貴重な情報が手に入る可能性が高いと考えられる。

2. 描画への色彩導入について

描画に色彩を加えた他の手法や研究として、HTP法における彩色の効果を検討したPayne（1949）の研究が挙げられ、Payne（1949）は、色彩を導入することでパーソナリティの表面下にあるいくつかの反応を浮き彫りにすることを示唆している。その後、BuckもHTP法に色彩を導入した研究を始めており、色彩版HTP法では家屋・樹木・人物の描画を求め、第1系列では鉛筆で、第2系列ではクレヨンを用いて描画している。また石田（1996）は、火のある風景描画法（FLT）を考案している。火のある風景描画法とは、鉛筆と色鉛筆（18色）を使用し、感情や情動との関連が深い「火」を表現することで、描き手の情緒表現をより直接的に示すことができるように考案されている。他にも、横田他（1999a）が彩色樹木画を提案し、臨床的な研究を行っている。彩色樹木画とは木を描いた後に、今度はクレヨンで彩色を行うといった手法である。この彩色樹木画に関して、サインペン使用、クレヨン使用、サインペン・クレヨン

使用といった条件の違いを検討し、統合失調症者に実施する場合、クレヨン・サインペン併用においては先に輪郭線を描くことが枠の機能を果たし、そのため色彩による動揺が抑えられたことを考察している。他にも中里（1978）は慢性の統合失調症の長期入院例を対象に開発された交互色彩分割法を発表しており、森谷（1986）は九分割統合絵画法を発表している。さらに角野（2004）は心理療法としての樹木画法を挙げており、心理療法として彩色することは樹木画そのものにエネルギーを吹き込むようで、生命感をより感じさせる作業であることを述べており、角野（2005）でも、彩色をしてもらうことで、心的エネルギー量や感情のレベルといった描き手の状況をより多く知ることができると述べている。

3. 統合失調症者に対する描画研究について

描画テストを実施する対象は多岐に渡るが、その中で統合失調症を対象とした研究も数多く見受けられる。その中で飯森（2000）は、とくに統合失調症やうつ病の患者の描画では臨床症状では捉えられない病状が明らかになることがあり、間接的に役に立つことを述べている。そのような描画に関連した研究として、まず風景構成法が挙げられる（中井，1970）。この風景構成法を中井（1970）が統合失調症患者に実施したところ、病型の違いによって描かれる絵の描写に差異が次のように見られた。それは例えば妄想型は、寛解例においてさえも風景構成がかなり強引で歪んだものであり、本人はその強引さを自覚していない。また空間は透視法的に不整合であって、複数の地平線を仮定せねばならない。その一方で、破瓜型は生気の乏しい風景ではあっても、ほとんどすべて整合的なものを作り上げていくか、あるいは構成を放棄していくという点について指摘している。また高橋（1974）はHTPP法によって統合失調症患者に出現すると考えられる描画サインについて正常群との比較を行った研究を報告している。その結果、家屋画15項目、樹木画22項目、男性像31項目、女性像31項目、人物像の差異1項目の合計100項目が正常群に比べて統合失調症群に多く出現したことを報告している。三上（1995）では、S-HTP法を用いて、統合失調症患者への量的な研究を実施し、全体、人物、家、木でカテゴリーされた、合計85項目の描画サインを提示している。それぞれのカテゴリーでの特徴についても述べられており、例えば全体について統合失調症群では、絵を統合的に描けない場合が多く、画面の使用範囲が狭く平板な絵になりがちであり、筆圧の弱い線、破線、不結合、震えて破線になっていたものが目立っていた。また人については統合失調症群では「描けない」という人が多く、木の項目について有意差は少なかったものの、枯れ木や幹や枝を単線で描くことが統合失調症群に有意に多いことが報告されている。次に山中（1976）は統合失調症患者と非定型精神病においてバウムテストに共通してみられた描画特徴について「漏斗状幹上開」を報告し、加えて幹の上端が解放しているために、幹の部分で内空間を形成していた曲線が上部では枝として外空間を形成する「メビウスの木」についても記している。さらに稲富他（2000）では、バウムテストの特徴を形態と内容の水準から数量的に分析し、統合失調症患者の樹木画は、

健常者に比べて形態が異なり、質的内容が乏しいことから、生活年齢よりも退行しており、対人関係における自己表現や意欲が乏しいという人格特性が示唆されていることを述べている。加えて横田他（1999a）は健常群と比較して統合失調症患者における描画特徴の研究を行っており、統合失調症者では特にクレヨンの使用で活動性の高まりと整合性の低下が認められている。さらに横田他（1999b）では、描画特徴による精神症状の判別の可能性について研究が行われ、陰性症状の判別のためには写実性が重要だと示唆されている。加えて黒－色彩樹木画テストでは、名島・増田は心理アセスメントハンドブック（1993）の中で、現実検討能力と関連があるとされる色の不自然な使用（逸脱色）が統合失調症患者に多いことを示唆している。

これらの先行研究から、統合失調症者に描画を実施することは、病者における何らかの共通性や健常者との差異を確認すること、また病者が抱える内的な世界を Th. と共有できる可能性も考えられ、今後も描画を用いた研究の必要性が考えられる。そのため黒－色彩樹木画テスト実施においても、統合失調症患者に共通する特徴を明らかにすることで、樹木画テストを用いた統合失調症の病態や患者の状態像を把握するための一助となる可能性が考えられる。そこで本研究では、統合失調症患者に焦点をあて、健常者と比較することによって、病者の持つ描画特徴を検討し、黒－色彩樹木画テストを臨床上で実践していく中での一つの手掛かりとしていきたい。

研 究 1

Ⅱ 目的

1. 研究目的

本研究では統合失調症患者に、黒－色彩樹木画テストを実施し、どのような特徴が出現するか検討する。その際、①健常群（女子大生）との比較、②統合失調症患者個人間に認められる個性や独自性に注目して検討する。

Ⅲ 方法

2. 研究方法

1) 調査対象者

統合失調症群は A 精神科病院、B 精神科病院に入院している統合失調症患者 9 名、通院している統合失調症患者 5 名であった。また女性 7 名、男性 7 名の計 14 名の内、慢性期の患者は 5 名、基本慢性期であるが、急性期を繰り返す患者が 1 名、残りすべては急性期を脱している患者であった。また健常群は出来るかぎり統合失調症群と年齢や性別を合わせるべきではあるが、今回は統合失調症群と同じ年代の調査協力者確保の難しさのため、双方の人数を合わせることを目的に関西圏にある 4 年制私立女子大学に所属している女子大学生 15 名を健常群とした。全体で 29 名のデータを分析対象とし、調査協力者の平均年齢は、統合失調症群が 40.7 歳（20 ～

69歳, $SD = 14.703$), 健常群が22.1歳 (19 ~ 47歳, $SD = 6.974$) であった。

2) 実施方法

黒－色彩樹木画テストにおいて2枚(鉛筆・色彩)を描き, その後で Post Drawing Dialogue (描画後の対話: 以下 Pdd) を行うセッションを実施した。なお調査を施行する際は他者が入室することがなく, 周りの音が聞こえにくい部屋で行った。なお描画時間は3 ~ 30分ほどであった(統合失調症群 = 黒樹木画平均 3.02分・色彩樹木画 5.92分, 健常群 = 黒色樹木画平均 4.44分, 色彩樹木画 8.59分)。

3) 黒－色彩樹木画テスト

黒－色彩樹木画テストは名島(1996)にならって, A4のケント紙を縦向きにそろえ, 鉛筆(HB), 12色の色鉛筆, 消しゴム, 鉛筆削りを用意し一本の木を描いてもらった。その際の教示は, 黒樹木画では「今から絵を描いてもらいます。これは絵の上手下手を調べるわけではありませんから, 気楽な気持ちで描いて下さい。でも, できるだけ丁寧に描いて下さい。消しゴムは使って下さい。それでは木を一本描いて下さい」とした。

色彩樹木画に移る際には「今度はここにある色鉛筆を使って, やはり木を一本描いて下さい。木はさっきと同じでも違った木でも構いませんので, 思うように描いて下さい。色は何色使っても構いません。でも, できるだけ丁寧に描いて下さい」とした。教示については, 調査者が被検者に口頭で伝え, 教示後, 黒－色彩樹木画テストを実施した。また実施中には被検者の様子を観察し, 木の描画方法, 描画中の行動などを, 調査者がメモに取って記録を行った。また色鉛筆の内訳は青, 紫, 赤, 桃, 橙, 黄, 黄緑, 緑, 水色, 薄橙, 黒, 茶の12色であった。⁽⁴⁾なお, バウムテストにおける Koch 法の教示方法では, 特定の指標を誘導する可能性が指摘されている(大辻他, 2003; 高橋・高橋, 2010)。そのため, 教示に関しては「1本の木」が適していると考え, 本研究の教示方法については「木を1本描いて下さい」を採用することとした。

4) 黒－色彩樹木画の分析方法

樹木画の分析にあたっては, (1) 色の数, (2) 空間使用量, (3) 樹木画の計測(樹冠の高さ・幹の高さ・幹幅), での3側面から検討を行った。

①色の使用数

色彩樹木画において, 使用された色の総数をカウントした。カウントは描画中に調査者がメモを取って記録したものから行い, 複数回使用された色については1色としてカウントした(最高で12色の使用となる)。

②空間使用量

一谷(1986)にならい, 用紙を横方向に14等分, 縦方向に20等分して280個の小領域に分割し, 使用された小領域を数えて空間使用量とした。空間領域は Grünwald の空間図式に用いられた4分画を基礎に, A(右上), B(左上), C(左下), D(右下)とし, 中央部に横6, 縦10の領域をO(60小領域分), 全体をT(280小領域分)とし, 各領域の使用量を黒－色彩樹木画に

において算出した。なお各空間領域の場所を Figure1 に示した。

③樹木画の計測

樹木画について、樹冠の高さ、幹の高さ、幹幅について一谷ら（1986）の方法を参考にして計測した。ただし本研究では樹冠が紙面を超えている場合、紙面の縁までを樹冠として計測を行い、それぞれの長さのみを計測した。なお、樹冠がないものや、単線の幹など計測が難しいものはデータから除外した。

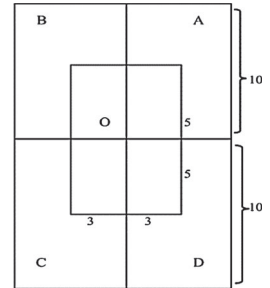


Figure 1 各領域の名称

1) 色の使用数についての分析結果

統合失調症群（以下 S 群）と健常群（以下 C 群）において、群（S 群・C 群）を独立変数、色を従属変数とし、1 要因分散分析を行った色彩樹木画の結果を Table1, Table2 に示した。

Table 1 色彩樹木画（色数）の記述統計

	S群	C群
	N=14	N=15
色数	2.93	5.27
	(1.592)	(2.120)

Table 2 色彩樹木画色数（群）の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
群	39.59	1	39.59	11.15 *
誤差	95.86	27	3.55	

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

分析の結果、色樹木画において「群」の主効果が有意であった ($F(1, 27) = 11.15, p < .05$)。特に C 群では色の使用が多くなることが示された。

なお、本研究では名島・増田（1993）で見られた逸脱色（幹や樹冠を紫や赤に塗るなどの不自然な色の使い方）の使用は S 群に認められなかった。

2) 空間使用量についての分析結果

S 群・C 群において、描画による空間使用量の平均値を Table3 に示した。なお領域として A（右上）、B（左上）、C（左下）、D（右下）、O（中央部）、T（全体）領域の平均値を算出した。

Table 3 黒－色彩樹木画（領域）の平均値

	S群				C群			
	黒樹木画		色彩樹木画		黒樹木画		色彩樹木画	
	N = 14				N = 15			
A領域	32.79		32.14		52.73		52.40	
	(22.05)	(20.56)			(16.43)	(17.71)		
B領域	38.29		36.50		44.47		53.73	
	(20.89)	(18.01)			(23.51)	(17.12)		
C領域	20.64		26.29		27.27		35.40	
	(13.43)	(17.09)			(15.42)	(19.76)		
D領域	16.93		20.50		34.67		35.53	
	(14.50)	(17.82)			(16.84)	(16.57)		
O領域	40.36		45.71		48.93		52.13	
	(19.12)	(16.38)			(11.65)	(8.89)		
T領域（全体）	108.64		115.43		159.13		177.07	
	(65.43)	(67.57)			(42.54)	(48.91)		

次に群（S群・C群）・領域（A, B, C, D, O）を独立変数，空間使用量を従属変数とし，2要因分散分析を行った黒樹木画の結果を Table4, Table5, Figure2 に示した。

Table 4 黒樹木画（群×領域）の記述統計

	S群 N=14	C群 N=15
A領域	32.14 (20.56)	52.40 (17.71)
B領域	36.50 (18.01)	53.73 (17.12)
C領域	26.29 (17.09)	35.40 (19.76)
D領域	20.50 (17.82)	35.53 (16.57)
O領域	45.71 (16.38)	52.13 (8.89)

Table 5 黒樹木画（群×領域）の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
群	5052.85	1	5052.85	5.59 †
誤差	24404.59	27	903.87	
領域	11530.62	4	2882.65	17.2 **
交互作用（群×領域）	1233.96	4	308.49	1.84
誤差	18135.85	108	167.92	

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

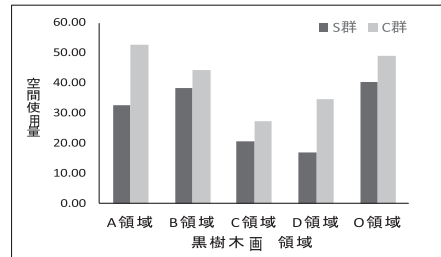


Figure 2 黒樹木画「領域」の平均値

分析の結果，黒樹木画において，「群」の主効果は有意傾向が認められ，「領域」の有意な主効果が認められたため ($F(1, 27) = 5.59, p < .10$, $F(4, 108) = 17.2, p < .01$)，S群はC群よりも空間使用量が少ない傾向が示された。交互作用は認められなかった ($F(4, 108) = 1.84, n.s.$)。また領域の主効果が認められたため，多重比較を行ったところ，O, A, B領域の使用がD, C領域の使用より多いことが示された ($p < .01$, ただしB領域 > C領域のみ $p < .05$)。

次に群（S群・C群）・領域（A, B, C, D, O）を独立変数，空間使用量を従属変数とし，2要因分散分析を行った色彩樹木画の結果を Table6, Table7, Figure3 に示した。

Table 6 色彩樹木画（群×領域）の記述統計

	S群 N=14	C群 N=15
A領域	32.79 (22.05)	52.73 (16.43)
B領域	38.29 (20.89)	44.47 (23.51)
C領域	20.64 (13.43)	27.27 (15.42)
D領域	16.93 (14.50)	34.67 (16.84)
O領域	40.36 (19.12)	48.93 (11.65)

Table 7 色彩樹木画（群×領域）の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
群	6708.09	1	6708.09	7.23 †
誤差	25051.62	27	927.84	
領域	9667.66	4	2416.92	17.4 **
交互作用（群×領域）	950.50	4	237.63	1.71
誤差	14980.41	108	138.71	

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

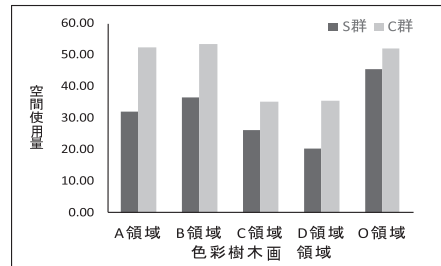


Figure 3 色彩樹木画「領域」の平均値

分析の結果、色彩樹木画において、「群」の主効果に有意傾向が認められ、「領域」の有意な主効果が認められたため ($F(1, 27) = 7.23, p < .10$, $F(4, 108) = 17.4, p < .01$)、S群は、C群よりも空間使用量が少ない傾向が示された。交互作用は認められなかった ($F(4, 108) = 1.71, n.s.$)。また領域の主効果が認められたため、多重比較を行ったところ、O, B領域の使用がC, D領域の使用より多いことが示された ($p < .01$)。また、A領域の使用量はO, B, C領域の使用量と有意差が認められず、D領域の使用量とのみ有意差 ($p < .01$) が認められた。

次にS群に対して、黒－色彩・領域（A, B, C, D, O）を独立変数、空間使用量を従属変数とし、2要因分散分析を行った黒樹木画の結果を Table8, Table9, Figure4 に示した。

Table 8 黒－色彩樹木画（黒－色×領域）の記述統計

	黒 N=14	色彩 N=14
A領域	32.79 (22.053)	32.14 (20.557)
B領域	38.29 (20.886)	36.50 (18.012)
C領域	20.64 (13.426)	26.29 (17.085)
D領域	16.93 (14.504)	20.50 (17.819)
O領域	40.36 (19.122)	45.71 (16.377)

Table 9 黒－色彩樹木画（黒－色×領域）の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
黒-色	206.43	1	206.43	0.74
誤差	3646.77	13	280.52	
領域	11076.686	4	2769.17	21.6 **
誤差	6654.51	52	127.97	
交互作用（黒-色彩×領域）	331.86	4	82.96	2.01
誤差	2150.94	52	41.36	

* $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$

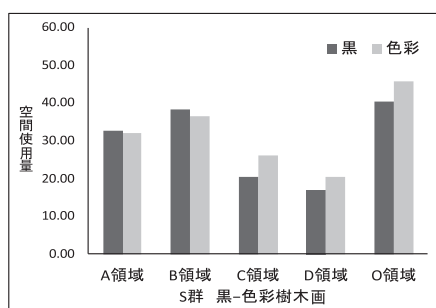


Figure 4 黒－色彩樹木画「領域」の平均値

分析の結果、黒－色彩樹木画1回目（S群）において、「黒－色彩」の主効果は認められなかったが、「領域」の有意な主効果が認められた ($F(1, 13) = 0.74, n.s.$, $F(4, 52) = 21.6, p < 0.1$)。交互作用は認められなかった ($F(4, 52) = 2.01, n.s.$)。また領域の主効果が認められたため、多重比較を行ったところ、O領域の使用がA, C, D領域の使用より多く ($p < .01$, ただしO領域 > A領域のみ $p < .05$)、B領域がC, D領域より多い ($p < .01$) が示された。さらに、A領域がD領域より使用量が多いことが示された ($p < .01$)。

同じくC群に対して、黒・色彩・領域（A, B, C, D, O）を独立変数、空間使用量を従属変数とし、2要因分散分析を行った黒樹木画の結果を Table10, Table11, Figure5 で示した。

Table 10 黒－色彩樹木画(黒－色×領域)の記述統計

	黒 N=15	色彩 N=15
A領域	52.73 (16.429)	52.4 (17.707)
B領域	44.47 (23.513)	53.73 (17.123)
C領域	27.27 (15.416)	35.4 (19.762)
D領域	34.67 (16.838)	35.53 (16.57)
O領域	48.93 (11.653)	52.13 (8.887)

Table 11 黒－色彩樹木画(黒－色×領域)の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
黒－色	669.93	1	669.93	3.65
誤差	2567.77	14	183.41	
領域	11440.89	4	2860.22	8.92 **
誤差	17966.51	56	320.83	
交互作用(黒－色彩×領域)	553.51	4	138.38	1.22
誤差	6344.29	56	113.29	

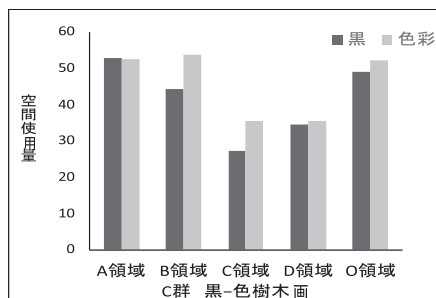
[†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$, ^{**} $p < .01$


Figure 5 黒－色彩樹木画「領域」の平均値

分析の結果, C群において,「黒－色彩」の主効果は認められなかったが,「領域」に有意な主効果が認められた ($F(1, 14) = 3.65, n.s.$, $F(4, 56) = 8.92, p < .01$)。交互作用は認められなかった ($F(1, 14) = 1.22, n.s.$)。また領域の主効果が認められたため, 多重比較を行ったところ, A領域がC, D領域よりも使用量が多いことが示された ($p < .01$, ただし A領域 > C領域のみ $p < .05$)。またO, B領域の使用がC領域の使用より多いことが示された ($p < .01$)。

3) 樹木画の計測についての分析結果

S群・C群(群)・黒－色彩を独立変数, 樹冠の高さを従属変数とし, 2要因分散分析を行った結果を Table12, Table13 に示した。

Table 12 黒－色彩樹木画(群×黒－色彩)の記述統計

	S群 N=13	C群 N=13
黒樹木画	9.277 (3.97)	14.58 (2.889)
色樹木画	10.40 (2.898)	14.51 (3.329)

Table 13 黒－色彩樹木画(群×黒－色彩)の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
群	288.11	1	288.11	14.68 *
誤差	471.08	24	19.63	
黒－色彩	3.557	1	3.56	1.64
交互作用(群×黒－色彩)	4.68	1	4.68	2.16
誤差	52.05	24	2.17	

[†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$, ^{**} $p < .01$

分析の結果, 樹冠の高さにおいて,「群」の主効果は有意傾向が認められたが,「黒－色彩」では有意な主効果が認められなかった ($F(1, 24) = 14.68, p < .10$, $F(1, 24) = 1.64, n.s.$)。交互作用は認められなかった ($F(1, 24) = 2.16, n.s.$)。この結果から, 黒樹木画と色彩樹木画の比較で

は樹冠の高さに差は認められないものの、S群はC群よりも樹冠が低い傾向が示された。

次にS群・C群（群）・黒・色彩を独立変数、幹高さを従属変数とし、2要因分散分析を行った結果を Table14、Table15 に示した。

Table 14 黒－色彩樹木画（群×黒－色彩）の記述統計

	S群 N=13	C群 N=14
黒樹木画	10.685 (4.832)	10.79 (2.392)
色樹木画	11.746 (4.279)	11.01 (4.010)

Table 15 黒－色彩樹木画（群×黒－色彩）の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
群	1.34	1	1.34	0.05
誤差	638.78	25	25.55	
黒－色彩	5.610	1	5.610	0.97
交互作用（群×黒－色彩）	2.34	1	2.34	0.40
誤差	144.46	25	5.78	

[†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$, ^{**} $p < .01$

分析の結果、幹の高さにおいて「群」「黒－色彩」ともに有意な主効果は認められなかった ($F(1, 25) = 0.05, n.s.$, $F(1, 25) = 0.97, n.s.$)。交互作用は認められなかった ($F(1, 25) = 0.40, n.s.$)。この結果から、S群とC群において幹の高さに差は認められず、黒樹木画と色彩樹木画においても幹の高さに差は認められなかった。

同じくS群・C群（群）・黒－色彩を独立変数、幹幅を従属変数とし、2要因分散分析を行った結果を Table16、Table17 に示した。

Table 16 黒－色彩樹木画（群×黒－色）の記述統計

	S群 N=14	C群 N=12
黒樹木画	3.664 (2.948)	5.40 (1.587)
色樹木画	4.271 (3.042)	5.27 (1.452)

Table 17 黒－色彩樹木画（群×黒－色彩）の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
群	24.10	1	24.10	2.24
誤差	257.87	24	10.74	
黒－色彩	0.725	1	0.725	0.66
交互作用（群×黒－色彩）	1.77	1	1.7714	1.61
誤差	26.34	24	1.10	

[†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$, ^{**} $p < .01$

分析の結果、幹幅において「群」「幹幅」ともに有意な主効果は認められなかった ($F(1, 24) = 2.24, n.s.$, $F(1, 24) = 0.66, n.s.$)。交互作用は認められなかった ($F(1, 24) = 1.61, n.s.$)。この結果から、S群とC群において、幹幅の差は認められず、黒樹木画と色彩樹木画でも、幹幅に差は認められなかった。

IV 考察

本研究では黒－色彩樹木画テストを用いて、統合失調症者に関してどのような描画特徴が出現するかを、色数、空間使用量、樹木画の計測（樹冠の高さ・幹の高さ・幹幅）による健常者との比較によって検討を行った。

今回の結果から、色の使用数についてS群はC群よりも色の使用が有意に少ないことが示さ

れた。名島・増田 (1993) は健常者では平均 4.3 色を使用し、統合失調症者は平均 3.6 色を有意に使用することが認められており、名島 (1999) では、今村 (1998) 「色彩バウムと発達段階との関連性」で明らかとなったデータを引用し、健常者において 50 歳代の男性では平均 5.4 色、女性では平均 4.5 色を使用し、40 歳代の男性では平均 5.3 色、女性では平均 4.4 色を使用していることを報告している。本研究でも S 群では平均 2.93 色、C 群では 5.27 色であり、C 群の色数が有意に多いことが認められた。ただ、本研究では C 群が女子大学生のみと偏りがあるため、色の使用数に違いについて、はっきりと違いを述べることは難しい。

次に黒樹木画における群 (S 群・C 群) と領域の比較、色彩樹木画における群 (S 群・C 群) と領域の比較どちらにも S 群は C 群に比べて空間使用量が少ない傾向が示された。この点は統合失調症者の内的生産性の低下が関連していることが推察されるものの、S 群における空間使用量の少なさは年齢の要因も忘れてはいけない。一谷他 (1988) の空間領域の使用量と加齢に関する研究では、高齢者になるほど使用量が少ないことが認められている。その知見から空間使用量の少なさが直ちに統合失調症に認められる特徴だと述べることは出来ないが、心理的なエネルギー水準の低さの指標となる可能性は考えられる。また、S 群と C 群で各領域の使用量に違いは認められなかったものの、黒樹木画と色彩樹木画の共通性として、O、B 領域 (用紙中央、用紙左上) の使用が最も多かった点が挙げられる。そのため、黒－色彩樹木画を描く際には、どちらの描画でも用紙中央や左上などの比較的、用紙上方を好んで描く者が多いことが示唆される。

次に S 群における黒樹木画・色彩樹木画と領域の比較、C 群における黒樹木画・色彩樹木画と領域の比較では、それぞれ領域に使用量の違いは認められていない。ただし黒樹木画と色彩樹木画において、S 群では O・B 領域 (用紙中央、用紙左上) が比較的多く使用されているが、C 群では A・O 領域 (用紙右上、用紙中央) が比較的多く使用される傾向が示された。高橋・高橋 (2010) が紹介している Grünwald の空間図式の観点によると、用紙左上は受動性の領域を示しており、どちらかという自閉性や内向性を示唆し、用紙右上は生への能動性の領域を示しており、目標などを示唆している。これらの視点からは、S 群は描画時に自閉的になりやすく、内的生産性の低下が表れる可能性が考えられる。一方、C 群は自閉的にはならず、描画に対して意欲的に取り組みやすく、描画を仕上げるという目標に向かって能動的に取り組むことができる可能性が推察される。また用紙中央は S 群でも C 群でも多く使用される領域であるが、Bolander の空間図式によると、用紙中央にあたる空間は情緒領域とされ、「意識された反応、社会的に受容される態度、情緒的・感情的経験、否定的な態度、原始的な反応、隠された情動 (Bolander, 1997/1999)」などが空間象徴の意味として挙げられている。中央の領域に、情緒的な意味合いがあるとするならば、用紙中央に描く行為には、描画する上での戸惑いや期待といった何らかの感情を描き手が感じていることを示唆するのかもしれない。ただし、それぞれの空間象徴の意味には、樹木のサイズ自体も重要になってくる。高橋・高橋 (2010) は、小

さいサイズの木を中央に描く場合には「一応安定した精神状態にあるが、用心深く用紙中央に描く被検者は、周りの環境から圧力を強く受けていると感じていたり、孤独感を感じていたり、不安定な気持ちのために可塑性を欠いている被検者に生じやすい」ことを指摘している。したがって空間象徴の意味だけで解釈は行わず、サイズや表現の仕方、他のサインとも比較して、その意味を考える必要性があろう。

次に、黒樹木画、色彩樹木画と群（S群・C群）における樹冠の高さや幹の高さ、幹幅の比較では有意な差はみられなかった。ただし、樹冠のみ黒樹木画と色彩樹木画どちらにも、S群はC群よりも低い傾向が示された。樹冠についての解釈は様々だが、高橋・高橋（2010）は樹冠における解釈の一つとして、内的衝動や感情を統制する理性や精神生活などを象徴することが多いと述べており、Bolander（1997/1999）も樹冠について、描き手の精神的・知的発達、興味の範囲、目標の性質、満足の対象を示唆することを述べている。C群との違いが見られた理由として、S群の病態水準によって現実への視野が狭まり、興味の範囲も限定されることや、描画そのものによって情緒面が揺さぶられることで、外界への意識の向け方とも関わりが深い樹冠への描きにくさに繋がった可能性は考えられる。

研 究 2

V 事例研究

筆者が統合失調症患者を対象とした調査研究時において、特徴的な描画を示した2つの事例を取り挙げる。その理由として、黒－色彩樹木画テストを実施する中では、描画内容が変化しない描画特徴と、描画内容が変化する描画特徴の2パターンが出現するため、その変化のあるなしのパターンに沿った事例の考察をすることが、黒－色彩樹木画テストを使用する上での有用性に繋がると考えたからである。すなわち、黒－色彩樹木画テストを実施したことにより、病者の描画にどのような変化や特徴が出現したのか検討することを目的とする。

1. 事例提示

1) 事例の概要

A氏：男性 30代前半。急性期を脱しており、症状も安定傾向にある入院患者である。

①黒－色彩樹木画テストの実施

描画順序と描画時の様子

黒樹木画（15分）：幹、枝を慎重に描いていき、そして、木の枝を分けるように描き足していき、消しゴムも使いながら丁寧に描いていた。A氏はその後、用紙をじっと見つめ、手先をやや震わせながら樹冠を描き始めた。そしてまたしばらくじっと用紙を見つめてから、今度は根

元に線を引き、根を閉鎖した。その後、同じようにしばらく用紙をじっと見つめてから「できました」と筆者に声をかけた。

色彩樹木画(32分)：まず茶色を使用し、幹は一筆描きをしてから、枝を描き始め、そして緑を使用して樹冠を描き、茶色で根元を閉鎖させ、幹を丁寧に塗り始めた。次に枝を塗り、その際にも幹からはみ出ないように慎重かつ丁寧に塗った。その後、枝を描き足してから、緑で樹冠の中を周りから塗り始め、徐々に内部に向かうように塗っていく。色鉛筆で色を塗る際は、樹冠や幹からはみ出ないように特に丁寧に塗っていく様子であった。

②描画内容

A氏の描画をFigure6に示した。

黒樹木画：棒状の枝、幹があり、とても慎重かつ几帳面に描かれており、コートかけのような木である。樹冠は枝を包み込んでいるが、根には安定感がなく倒れてしまいそうで、描画からは硬さと不安定さを感じさせる。

色彩樹木画：棒状の枝であることや幹の様子から、黒色樹木画同様に樹木画全体からは几帳面さを感じさせる。また判を押した様に黒樹木画と概ねそっくりである。なお幹、樹冠の内部とともに塗り方に多少の粗さはあるが、じっくり丁寧に緑の樹冠や茶色の幹を塗り込まれており、一生懸命に内部を埋めようと努力しているように思われる。

③A氏の描画特徴について

A氏の描画特徴の一つとして、黒樹木画や色彩樹木画どちらにも形態やアイテムの変化は見られず、判を押したように概ね同じ樹木画を描いていることが特徴として挙げられる。全く同じような樹木であることは、それだけA氏が同一であることを重視していた可能性があり、それらは、A氏の内的な世界の変わりにくさ、A氏が抱える病態が変わらずそのまま固定されていることが表出されているのではないかと推察される。これは、黒・色彩樹木画テストの形態で左右の対称性が意識されているように見受けられる事からも推察された。それは、現状のまま変わらずにありたいというA氏自身の在り方が投影されているようにも考えられ、変わらないということ自体がA氏なりの自己を守る手段であり、一種のコピーングである可能性も推察された。

次に、A氏の描画特徴として黒樹木画では全体の構成が重視されているという印象が挙げられる。それは全体的な構成ができるだけ同じように左右のバランスを考えて描かれている事から推察され、それはまるでA氏が自分の不安定さを打ち消そうとしているようにも感じられるからである。この点に関しては、黒樹木画では鉛筆のみしか使用できない制限があり、そういった誤魔化しの利きにくい鉛筆という描具だからこそ、A氏が元々抱える内的な不安定さがよりはっきりと表出されたのではないかと推察される。

加えて、色彩を塗る事自体もA氏が重視していた可能性が描画特徴として考えられる。それ

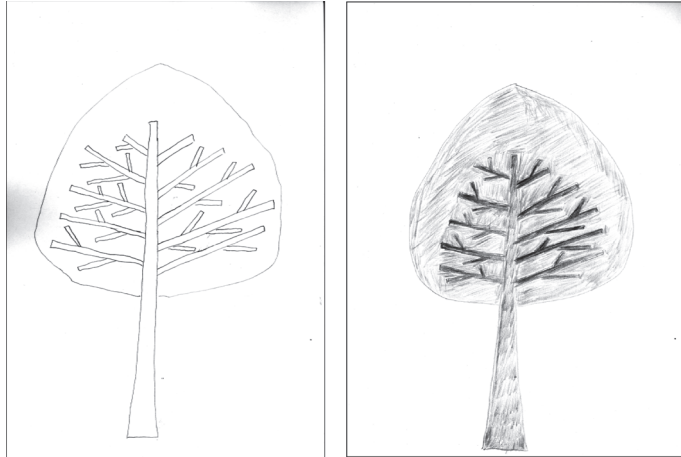


Figure 6 事例 A の黒－色彩樹木画テスト

は色彩樹木画において、かなり几帳面に色彩を塗り込んでいく様子や、黒樹木画では15分だった描画時間が、色彩樹木画では32分と倍以上の時間をかけて描写されていた事から推察される。この色彩樹木画に移行するということは、本来、黒樹木画で終わるはずだった描画をまた新しく始めるという過程でもある。植田（2018b）においても、色彩樹木画の導入が描き手に対して少なからず負担になることを指摘しており、再び描画をするという行為はA氏への負担はあったのかもしれない。加えて、色彩樹木画に移行した中で、表現道具は1色から12色へと一気に多様になってしまう。そのため、色彩の導入によって、A氏の内面では少なからず心理的動揺が生じることとなり、黒樹木画ではスルーできていた空白に注目させる結果となったことが考えられる。ただしA氏としては、とても丁寧に描画できたことは、Pddでも「色を塗った方がバランスも良くなった」「色を塗った方が木に近くなる」というコメントしたように、色彩樹木画を描いたことによって、本来のイメージにより近い描画ができたという満足感へと昇華されたことが考えられる。また、A氏は色彩を塗る過程では、とても慎重かつ丁寧に（あるいは固執的に）描いていたが、このことは色彩を塗って空白を埋めるという行為を、この描き手が重要としていた可能性が推察される。この埋めようとする行為は、黒樹木画に見られる根元や枝、樹冠をしっかりと閉じて、まるで中身が出ないように描画している様子と重なるのではないかと考えられた。以上から、A氏の描画では、色彩導入による刺激への反応や、色を塗りこむことで不安定さを収めようとしていたこと、また色彩樹木画を描いたことで本来のイメージに近くなり描画への満足感へと繋がったことが考えられる。さらに2枚の描画を通してA氏の生真面目さが窺われ、これらが黒－色彩樹木画テストを通して表現されていたと考えられる。

2) 事例

①事例の概要

B氏：男性 30代前半。急性期を脱しており、症状も安定傾向の外来通院患者である。

②黒－色彩樹木画テストの実施

描画順序と描画時の様子

黒樹木画(3分)：鉛筆を持ち、少し考えてから、幹、根、枝と手早く描き、樹冠のバランスを測るよう描いて「できました」と声を掛ける。

色彩樹木画(5分)：茶色の色鉛筆を手に取り、幹を描いた後に黒を使って、うろこ模様を描く。途中まで丁寧に描いていたが、「かなり大雑把に描きますね」と一声、筆者にかけてからは手早く模様を描き上げる。そして茶色を使って、うろこ模様など木全体を塗っていく。

②描画内容

B氏の描画を Figure7 に示した。

黒樹木画：用紙中央に描かれ、根が地面に張っている様子から安定感が窺える。全体のバランスから描き手が安定していることが感じられ、また枝の様子から内的なエネルギーの循環もされているように思われる。幹が細いため力を込めると折れてしまいそうだが、その分、根元でしっかりと安定を図ろうとしている印象である。

色彩樹木画：黒樹木画とは、まるで違う描写の仕方であり、樹皮にはうろこ模様を描くなど、細部に凝っている。全体を見てから細部に目をこらす様で、とても慎重な印象である。

③描画特徴について

B氏の描画特徴として、まず黒樹木画と色彩樹木画において大きな変化が見られたことが指摘できる。黒樹木画では木の全体像が描かれていたが、色彩樹木画に移ると木の全体像ではなく、木の一部分(幹)の描写に留まり、幹のうろこ模様も出現している。これらの変化が生じた理由として、まず考えられることは、黒－色彩樹木画テストという2枚の描画に取り組む手法が描き手への刺激、あるいは負担となり、そのため色彩樹木画では描写が一部分になった可能性が考えられる。色彩樹木画での Pdd では、「上下描かなくていいから楽だな。本当はこら辺に松の尖ったやつを描こうと思ったけど、いいかなって」「描いているうちにドアップだし描くのが楽だなあと」という内容が説明されており、もう一枚描くという行為が描き手への負担になった可能性は否めない。また色彩樹木画で見られた幹のうろこ模様の出現は、情緒が脅かされるかも知れない恐れ(高橋・高橋, 2010)が、色彩への反応として現れたこと、B氏が抱えている外界への警戒心であること(高橋・高橋, 2010)が推察される。ただし1枚で終わらず、2枚描くという行為が、絵を描くことの好きなB氏を刺激し、そのため同じような木を描こうとしなかったことも考えられる。したがって色彩樹木画の導入は、少なからず描き手の負担となるが、それと同時に描き手の興味を刺激することが推察され、黒樹木画と色彩樹木画の

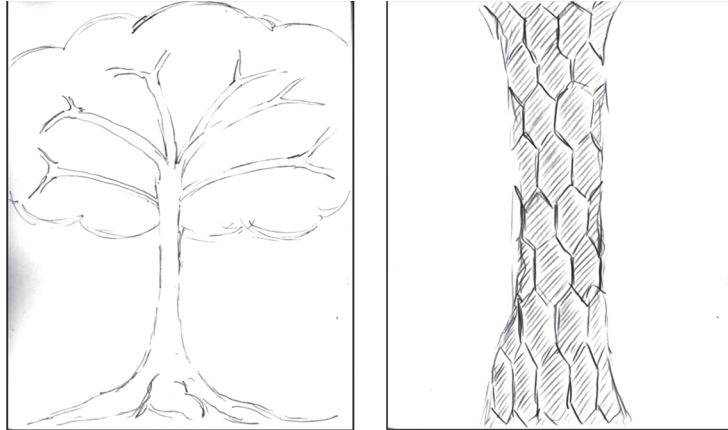


Figure 7 事例 B の黒一色彩樹木画テスト

変化は結果的に描き手の特徴を表したと考えられる。

次に色彩樹木画で見られた幹の部分的な描き方が描画特徴として挙げられる。B 氏の描く色彩樹木画は幹の描写しかされておらず、描画後では「ドアップの木を描いてみようかなって」と B 氏は話している。このような木を一部分のみに注目して描くことについて、高橋・高橋（2010）は、視野が狭く、外界と自己の関係を的確に把握していなかったり、明確な自己像を有していなかったり、適応を失った精神障害者が描きやすいことを述べている。そして高橋・高橋（2010）では、幹だけを描く被検者について、現在の感情に支配されているために理性による統制を失い、洞察力を欠いていることが多いことも指摘している。横田（1992）は、統合失調症患者のパウムテストの特徴として、空間認知の歪みを指摘し、全体よりも部分を優先的に捉えようとする態度について述べている。今回の B 氏も、1 枚目では樹木の全体像に注目しているにも関わらず、2 枚目では幹の一部分に注目するといった捉え方へと瞬間的に変わっている。そこには細部まで細かく見て、物事を確認しようとする B 氏の持つ性格傾向が示されていることも考えられるが、B 氏の視点が極端になりやすく、より自閉性が高まったようにも考えられる。また Bolander（1977/1999）によると、幹は情緒機能と関わりがあることを述べている。このように幹が情緒機能と関わりがあるならば、色彩樹木画において幹の存在が強調されるように描かれた点は、やはり色彩との関連が推察される。ロールシャッハ・テストにおいても色彩反応は、感情や情緒の指標であり（片口，1987）、色彩は描き手の情緒には何らかの影響を与えることが考えられる。したがって色彩樹木画の変化には、色の要因が少なからず影響していることは考えられ、色を使うからこそ、一枚目よりもしっかりとした幹を描きたいと描き手の情緒面が揺さぶられたのかもしれない。

加えて色彩樹木画において、幹のうろこ模様を描く際には、すべて一定の形で描かれている。このような B 氏の描き方には、自閉性や固執性が感じられ、用紙にはみ出るように一直線に描かれた幹は、その先がどうなっているのかも不明である。B 氏が想像した描画イメージは、こ

の用紙には収まりきらないほど大きい樹木なのかもしれない。この収まりきらないイメージを幹の樹皮でしっかりと固めることによって、拡散しがちなイメージに対して自ら枠をつけた可能性も推察される。ただB氏の描写の仕方には、そのようなネガティブな意味合いのみ示されているよりも、むしろ黒樹木画で全体を描いたことでうまく表現できなかった幹というアイテムを、色彩を用いて再び描き直したからこそ自分のイメージを絵の中にまとめることが出来たようにも考えられる。すなわち、このように幹を樹皮でより固めて描くという描き方はB氏なりの自己を守る方法であり、コーピングとしての役割を兼ねている可能性も考えられた。

VI 研究2のまとめ

研究2では、黒－色彩樹木画テストを実施したことにより、病者の描画にどのような変化や特徴が出現したのかを検討した。

まず事例A氏では、バランスを測ることや色を塗り込むことを重視しているように思われ、丁寧に描画する中で描き手の内的な世界の変わりにくさ、色を塗り込むことで自分の内部を埋め、樹木画の対称性から安定への渴望が示されていたように考えられた。事例B氏では、黒樹木画と色彩樹木画それぞれの表現が全く違う変化が2枚を通したことで見受けられ、その中でも色彩樹木画での幹の描き方が特徴的であった。黒－色彩樹木画テストの描画において、大きな変化が見られたことは、再び同じものを描きたくないという描き手のこだわりを刺激した可能性や、色彩そのものの影響が表れたと推察された。加えて黒樹木画と色彩樹木画の2枚を通して眺めることによって、B氏自身の警戒心、表現へのこだわり、外的状況への負担や不安が示されているようにも見受けられる。さらに黒樹木画では全体像の描写がされたにも関わらず、色彩樹木画では幹の部分的な描写へと瞬間的に変化した点は、2枚を描画すること自体が負担となった可能性や、B氏の自閉性の高まったようにも思われた。

以上の事例から、S群における黒－色彩樹木画テストの描画において、描かれた樹木画を丁寧に見ていくと、その人が持つ健常者とは違う描画特徴やパーソナリティ特徴が現れることを示唆していることが明らかとなった。ただし、青井他(2004)が述べる様に、樹木画テストは簡便な方法がゆえに、経験の足りない初心者が解釈をすると間違った評定を行いやすいことを指摘している。そのため、樹木画の中から考えられる特徴について、過度な解釈をしていないか実施者は常に考えることが望ましいと考える。それは1枚法よりも得られる情報が多くなることが推察される黒－色彩樹木画テストにおいても同様の注意点であり、より慎重に解釈を行っていくことが必要である。しかし、黒－色彩樹木画テストを実施することで、描き手の描画特徴が表れることが上記の事例において示されており、そのことが黒－色彩樹木画テストで得られる描き手の理解に関する貴重な手がかりの一つになることが考えられる。また、それは特に2枚描いたこと、色を使用したことが関係していることが推察される。この点については2つの事例に共通し、これらの事例から色彩樹木画を導入したことで、描画内の変化のあるなし

がよりはっきりと捉えることが可能になったと考える。加えて筆者には黒樹木画から色彩樹木画に移行し、色を塗り込むこと自体が病者の内的な世界に何らかの変化を促したように思われてならない。それは事例 A 氏における色彩樹木画での描画時間の長さや、事例 B 氏における色彩樹木画における変化、描き手が色を塗り込む様子から推察された。風景構成法における彩色段階について、角野（1994）が描き手は形態を認知するという能動性を発揮しながら彩色を行っており、塗られた色によって喚起された情動をコントロールした上で、再び形態を認知して彩色を行っていることを述べている。さらに彩色段階において、描き手自身は自分という存在を見つめるという。黒－色彩樹木画でも色鉛筆で塗るという要素が含まれており、色に移行する過程を、色から受ける刺激をコントロールしながら、樹木を再び認知していく過程と考えるならば、色彩樹木画の役割の一つとして、2 枚目に移行する中において自分の表現を振り返るという意味もあるのではないかと考える。

これまで描画内における変化について述べてきたが、実際の統合失調症患者を目の当たりにすると表面上は何の変化も見られず、変わりにくさが目立つかも知れない。このような統合失調症の変わりにくさについて、横田（2012）は慢性期の患者で変化が少ない人がおり、そのような人は「常同」「無為」「自閉」と呼ばれることを述べている。加えて横田（2012）は、そのような患者を前にした治療者が「自閉の殻を破ろう」と意気込むことが逆に患者を悪化させることに言及している。この点から描画に変化があることが必ずしも良いのではなく、むしろ描画の変わらなさを尊重する治療者の姿勢も重要であることが考えられる。事例 A 氏では形態の変わらなさを特徴として挙げているが、変わらないからこそ考察できた部分があり、そうした変わらなさこそが統合失調症という病の特徴の一つを映し出しているのではないかと推察される。こうして指摘された描画特徴は、黒樹木画と色彩樹木画を通したからこそ、よりはっきりと表出されたのであり、黒－色彩樹木画テストを実施したからこそ解釈できたのではないかと考える。

なお本研究では、健常群との比較を通して、黒－色彩樹木画テストにおける統合失調症患者の描画特徴について検討を行った。今後の課題としてはさらに描画を蓄積し、今回得られた結果の信頼性を上げる必要性が考えられる。さらに調査協力者の性差や年齢にも偏りがあるため、統合失調症群と同じような年代の男女に協力を募る必要性も挙げられる。本研究で得られた知見を軸に、今後は色彩の意味や描き手の表現についてより詳細に検討を進めることで、黒－色彩樹木画テストを臨床場面でより活用できるのではないかと考える。

Ⅶ 引用文献

青井利也・水田敏郎・藤澤清（2004）. 高齢者バウムテストの定量的評価についての基礎研究仁愛大学研究紀要, 2, 97-106.

Bolander, K（1977）: Assessing personality through Tree Drawing. 高橋依子（訳）（1999）. 樹木画によるパーソナリティの理解 ナカニシヤ出版

- Buck, J. N. (1948) : The H-T-P technique: a qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of Clinical Psychology*, 4, 317-396. 加藤孝正・荻野恒一 (訳) 1982 HTP 診断法. 新曜社飯森眞喜雄 (2000). 芸術療法の適応と注意点. 心の科学, 92, 24-30.
- 稲富宏之・田中悟郎・林田博典・太田保之 (2000). バウムテスト特徴からみた慢性精神分裂病患者の人格特性—バウムテスト特徴の数量的検討— 長崎大学医療秘術短期大学部紀要, 13, 97-101.
- 石田弓 (1996). 火のある風景描画法に関する基礎的研究—健常者と分裂病者の描画内容と描画形式— 臨床描画研究, 11, 214-237.
- 一谷彊・林勝造・国吉政一 (1986). バウムテストによる生涯的発達研究 (I): 樹冠と幹の関係指標の発達の傾向と精神的加齢現象の検討 京都教育大学紀要, 69, 53-68.
- 一谷彊・相田貞夫・小林敏子・津田浩一・山下真理子・引田洋二・林勝造・国吉政一・松井孝史 (1988). バウムテストによる生涯的発達研究 (Ⅲ) 空間領域の使用量と加齢の関係 京都教育大学紀要, 72, 1-29.
- 角野善宏 (2004). 描画療法から観たこころの世界 統合失調症の事例を中心に. 日本評論社
- 角野善宏 (2005). 病院臨床におけるバウム技法 山中 康裕・角野 善宏・皆藤 章 (編) バウムの心理臨床 京大心理臨床シリーズ. 創元社
- 片口安史 (1987). 新・心理診断法. 金子書房
- 皆藤章 (1994). 風景構成法——その基礎と実践. 誠信書房
- 森谷寛之 (1986). イメージの多様性とその統合—マンダラ画法について— 日本教育心理学会総会発表論文集, 26, 948-949.
- 三上直子 (1995). S-HTP 法—統合型 HTP 法による臨床的・発達のアプローチ 誠信書房
- 村田敏晴・村田陽子・名島潤慈 (2001). 黒色バウムと色彩バウムの比較 描画の順序効果とバウム内容の検討 山口大学心理臨床研究, 23-27.
- 中井久夫 (1970). 精神分裂病者の精神療法における描画の使用—特に開発によって作られた知見について— 芸術療法, 2, 77-89.
- 中井久夫 (1996) 風景構成法. 山中康裕編, 風景構成法その後の発展. 岩崎学術出版社
- 中里均 (1978). 交互色彩分割法—その手技から精神医療における位置づけまで— 芸術療法, 9, 17-24.
- 名島潤慈・増田勝幸 (1993). バウム・テスト. 上里一郎監修, 心理アセスメントハンドブック. 西村書店
- 名島潤慈 (1996). 黒—色彩バウム二枚法の意義 熊本大学教育学部紀要人文科学, 45, 271-281.
- 名島潤慈 (1999). 黒—色彩バウムテストの解釈. 熊本大学教育実践研究, 16, 61-65.
- 大辻隆夫・塩川真理・田中野枝 (2003) : 投影樹木画法における実の教示を巡る Buck 法と Koch 法の比較研究 児童学研究, 33, 19-23.
- Payne, J. T. (1949). Comments of the analysis of chromatic drawings. *Journal of Clinical Psychology*, 5, 75-76.
- 高橋雅春 (1974). HTP テストによる正常者と精神分裂病者の比較. 関西大学社会学部紀要, 7, 77-94.
- 高橋雅春・高橋依子 (2010). 樹木画テスト. 北大路書房
- 植田愛美 (2018a). 描画を眺める際における熟練者の主観的体験に関する研究—黒—色彩樹木画テストを通して— 佛教大学大学院紀要教育学研究科篇, 46, 135-148.
- 植田愛美 (2018b). 黒—色彩樹木画テストにおける主観的描画体験についての研究. 臨床描画研究, 33, 83-99.
- 山中康裕 (1976). 精神分裂病におけるバウムテストの研究. 心理測定ジャーナル, 12, 18-23.
- 横田泉 (2012). 統合失調症の回復とはどういうことか. 日本評論社
- 横田正夫 (1992). バウム・テスト—分裂病スペクトラムに対応する歪んだ描画表現. 精神科治療学, 7,

249-257.

横田正夫・伊藤菜穂子・清水修（1999a）. 精神分裂病患者の彩色樹木画の検討（第1報）. 精神医学, 41, 405-410.

横田正夫・伊藤菜穂子・清水修（1999b）. 精神分裂病患者の彩色樹木画の検討（第2報）. 精神医学 41, 469-476.

（うえだ まなみ 教育学研究科臨床心理学専攻博士後期課程満期退学）

（指導教員：松瀬 喜治 教授）

2018年9月28日受理